

1 真昼の暗黒

[1956年 現代ぷろだくしょん]



1951年に山口県で実際に起きた強盗殺人事件「八海（やかい）事件」を題材に、無実の罪を着せられた四人の若者たちの悲劇と、彼等の無実を信じる弁護士との奮闘を描いた社会派ドラマ。本作が封切られた当時は、高等裁判所で无罪を告げられた四人の若者が最高裁へ上告していた時期であったが、

今井正は、脚本家の橋本忍と事件に関する綿密な調査を重ねた末に、四人が無罪であるというシナリオで映画化に臨んだ。今井正の回想によると、脚本が完成した段階で、最高裁から映画製作を中止するように圧力がかけられたという。しかし今井は、「万が一、今後四人が有罪になったら監督を辞めよう」という強い信念のもとで、完成にこぎつけた。実際、封切から12年後の1968年に、四人の無罪が正式に確定し、冤罪事件であったことが証明されたのである。

「キネマ旬報」ベストテン第1位。

(白黒/スタンダード/モノラル/124分)

出演者

植村清治 草薙幸二郎
小島武志 松山照夫
青木庄市 矢野宣
宮崎光男 牧田正嗣
清水守 小林寛
永井カネ子 左幸子
近藤弁護士 内藤武敏
清水の伯父 雄二 山村聡
山本弁護士 菅井一郎
清水の母 保子 夏川静江
植村の母 つな 飯田蝶子
宮崎の母 里江 北林谷栄
魚屋 松村宇平 殿山泰司

スタッフ

原作 正木ひろし
脚本 橋本忍
監督 今井正
撮影 中尾駿一郎
照明 平田光治
録音 空閑昌敏
音楽 伊福部昭
美術 久保一雄

2 悪い奴ほどよく眠る

[1960年 東宝=黒沢プロダクション]



黒澤が自身のプロダクションを起こして東宝と共同製作した作品。日本未利用土地開発公団による贈収賄事件の責任の一切を負われ、やがて死に追いやられた公団の課長補佐の息子が、汚職のカラクリを暴くため、公団副総裁の女婿にして秘書となり、事件に関わった副総裁の部下たちを執拗なまでに

追いつめてゆく復讐行為を描いている。この復讐劇がほころびを見せるのは、三船敏郎演じる復讐の鬼の、足が不自由な妻への優しさと、禁欲的なまでの愛情が、極点に達するときである。『隠し砦の三悪人』（1958）に続く、この白黒のワイドスクリーン作品は、戦後の政界に蔓延する汚職に切り込んだ、息もつかせぬサスペンス映画であるとともに、黒澤をはじめ小国、菊島、橋本、久板ら五人の脚本によって緻密に組み立てられた、見事な娯楽映画でもある。「キネマ旬報」ベストテン第3位。

(白黒/シネマスコープ/モノラル/151分)

出演者

西幸一 三船敏郎
岩淵 森雅之
佳子 香川京子
辰夫 三橋達也
守山 志村喬
白井 西村晃
板倉 加藤武
和田 藤原釜足
野中 笠智衆
岡倉 宮口精二
新聞記者A 三井弘次
有村 三津田健
顧問弁護士 中村伸郎

スタッフ

脚本 小国英雄
久板栄二郎
菊島隆三
橋本忍
黒澤明
逢沢譲
猪原一郎
矢野文雄
下永尚
佐藤勝
村木与四郎

3 張込み

[1958年 松竹(大船)]



1955年「小説新潮」に掲載された松本清張の短編小説を、橋本忍脚本、野村芳太郎監督で映画化した作品。東京でおきたピストル強盗事件の共犯者・石井の行方を追う若手刑事・柚木とベテラン刑事・下岡は、石井の昔の恋人・さだ子が住む佐賀市に向かう満員の列車に乗り込む。二人は銀行員の後妻となったさだ子の家の向かいの安宿で張込みを開始した。暑い夏の日々、年の離れた吝嗇な夫と先妻の二人の子どもの世話に明け暮れるさだ子の前に、ついに石井があらわれる。ドキュメンタリー・タッチのリアルな描写が緊迫感を盛り上げる。かつての恋人との再会によって、無気力な日常生活の顔から一変して、生き生きとした束の間の輝きを放つさだ子を演じた高峰秀子の姿が印象深い。松本清張原作・橋本忍脚本・野村芳太郎監督のトリオ作品としては他に『ゼロの焦点』（1961）『影の車』（1970）『砂の器』（1974）があり、いずれも話題を呼んだ。野村監督が手がけた松本清張原作のものでは他に『鬼畜』（1977）『疑惑』（1982）がある。「キネマ旬報」ベストテン第8位。

(白黒/シネマスコープ/モノラル/116分)

出演者

柚木刑事 大木実
下岡刑事 宮口精二
その妻 菅井きん
その長男 竹本善彦
横川さだ子 高峰秀子
その夫 清水将夫
犯人 石井 田村高広
主犯 山田 内田良平
高倉弓子 高千穂ひづる
その父 藤原釜足
その母 文野朋子

スタッフ

原作 松本清張
脚本 橋本忍
監督 野村芳太郎
撮影 井上晴二
照明 鈴木茂男
録音 栗田周十郎
音楽 黛敏郎
美術 逆井清一郎

4 飢餓海峡

[1965年 東映(東京)]



原作は、「週刊朝日」に連載された水上勉の長編推理小説である。北海道で脱獄囚による強盗殺人事件が発生した。その日は青函連絡船の遭難事故が起きた日でもあり、事件の解明は難航を極めた。やがて10年の歳月が過ぎた頃、舞鶴で女性の変死体が見つかったことから、事件はようやくその全貌を見せはじめた。貧しさから脱出するため罪を犯した男、貧しさゆえに犯人の恩を忘れなかった女、そして事件を執念深く追いかける刑事ら、社会の底辺で懸命に生きる人々の喜びと悲しみを描いたこの作品は、深い人間観察による力強い演出で内田監督の代表作であると同時に、戦後日本映画の成果の一つでもある。荒々しい質感を出すため、16mmフィルムで撮影が行われた。ちなみに、爪のエピソードは原作にはなく、映画独自のもの。三国連太郎と左幸子の力演、そして『喜劇の伴淳』がシリアスな老刑事を演じて見事である。「キネマ旬報」ベストテン第5位。

白黒/シネマスコープ/モノラル/183分)

出演者

犬飼多吉/樽見京一郎 三国連太郎
杉戸八重 左幸子
弓坂刑事 伴淳三郎
味村刑事 高倉健
八重之父 長左衛門 加藤嘉
樽見の妻 敏子 風見章子
本島信市 三井弘次
妻 妙子 沢村貞子
東舞鶴署長 藤田進
和尚 山本麟一
記者A 室田日出男

スタッフ

原作 水上勉
脚本 鈴木尚之
監督 内田吐夢
撮影 仲沢半次郎
照明 川崎保之丞
録音 内田陽造
音楽 富田勲
美術 森幹男